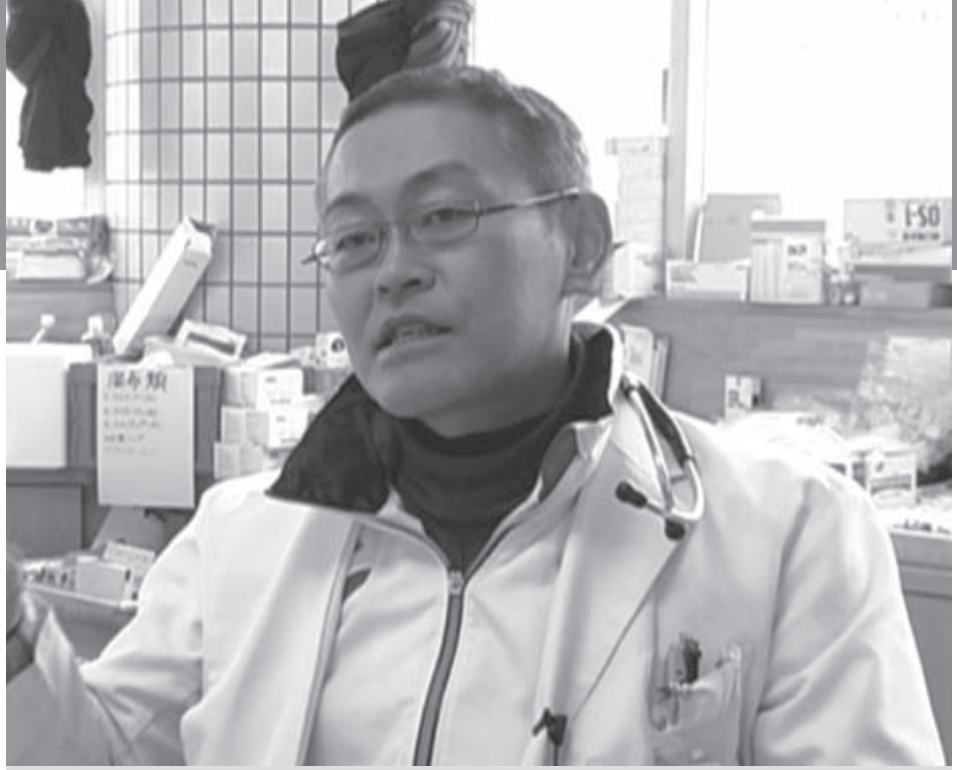
INTERVIEW

女川町立病院
院長　齋藤　充 先生



【プロフィール】　齋藤 充先生　1989年自治医科大学卒業，1991年に県立猪苗代病院に赴任. 途中3年間大学に戻るが，6年間勤務. 2000年から県立宮下病院に勤務. 2001年から磐梯町保健医療福祉センター副センター長として勤務. 2010年 院長として女川町立病院に赴任.

被災者であり，しかし，まず医療者として.

聞き手：山田隆司　公益社団法人地域医療振興協会 地域医療研究所所長
宮崎国久　東京ベイ・浦安市川医療センター副管理者

3月11日，その時

山田隆司（聞き手）　3月11日14時46分，東北地方太平洋沖地震が起きてから今日で3週間と少しが経ちました. ここは，震災で町が壊滅的な被害を受けた宮城県女川町の女川町立病院です. 当地はまだまだ不安定で落ち着かない状況です. 今ここの窓から外を見渡すとあっと驚くような光景が広がっています. 今日は初期の時点から現地に入った宮崎国久先生にも同席していただいて，自らも被災しながら病院に留まり医療を続けている院長の齋藤 充先生にお話を伺います.

齋藤 充　3月11日は，4月から放射線技師と臨床検査技師について地域医療振興協会の支援をいただくために会議をしている最中でした. 廊下に出て壁に掴まったり柱に掴まったりしましたが，ひょっとしたらこのまま病院が倒壊するのではないかと思われるような強い揺れが3分ぐらい続きました. 女川町は津波で何度か被害を受けたことがあったので，町民は地震に遭ったら高いところに逃げなくてはいけないということを，親から言われて育っているのですね. ですから病院の周りに住んでいた方も，地震が来た途端，病院のほうに避難して来ました. 病院では地震でけがをした人が運ばれて来ると考

えてトリアージしやすいように仕切りを始めていました．また1階のホールには避難して来た人がどんどん集まって来て，あっという間にいっぱいになってしまったので，歩ける人には2階のセンターアトリウムへ移動していただきました．私はショックで過換気症候群を起こした患者さんが運ばれて来たのでその対応をした後に病棟を回っていました．そのころ職員は駐車場で避難して来る方の車の誘導をしていたという状況です．そして何分くらい経ったころか，慌ただしかったのではっきりした記憶はないのですが，病棟の廊下を歩いているときに，誰かが「大きな引き波があったから，津波が来るぞ！」と言っているのを耳にしたのです．それで外がどんな状況になっているのかを確認するために，海の見えるところに行ったところ，もう病院の目の前まで第一波の波が迫っていたのですね．病院は海抜16メートルほどの高台にあったので，ここまで来ることは絶対にないとみんな安心していたのですが，私が最初に見たときにはもう病院の目の前まで水が来ていて，今まであった町並みが全部水に呑まれてしまっていました．あぁ，これは駄目だな…と思って，とにかく1階に避難していた人たちを全部2階に上げなければと，下に降りようとしたらもう水が入って来ていて，階段を降りられませんでした．ちょうどそのとき，駐車場のフェンスを越えて水が入って来るのが見えたのですが，駐車場にあった車がぐるぐるぐるぐる回りながら流されていました．

山田　地震が起こってから，津波が来るまでに時間はどれくらいあったのですか？

齋藤　第一波は30分以内だったのではないかと思います．病院まで上がって来たのは恐らく第二波か第三波だと思います．駐車場で見ていた人の話では，いったんは病院の手前で水が止まって引いて，第二波が上がって来たときに駐車場のものがすべて流されたということでした．

山田　第一波が来て第二波まではそう間隔はなかったのですか．

齋藤　10分から15分くらいだったと思います．みんなまさか病院の中まで水が入って来るとは思わなかったので，1階にも職員がかなりたくさんいました．処置室には看護師も患者さんもいましたし，事務職員も1階で仕事をしていました．駐車場で車の移動を指示していた職員たちも驚いて病院の中に入って来ました．訪問看護に行った先で地震にあって，患者さんを連れて一緒に病院まで来て，車が渋滞していて駐車場に上がれないので，患者さんをおぶって病院に戻った看護師もいました．

高台に建つ女川町立病院

後から話を聞くと，駐車場まで逃げて来たものの，ここまでは絶対来ないだろうと駐車場の中でラジオを聞きながら待っていた人もいたそうです．声を掛けて何人かは中に入ったのですが，そのまま車で待っていた人は車とともに流されてしまいました．病院の中にいた職員も，1階にいた職員はみんなそのまま水に浸かって，椅子や机に掴まって流された人もいますし，狭い部屋にいた職員は外から水が入って来て，どんどんどんどん身体が浮かされて，残り本当に30センチのところまで水が上がってもうこのまま助からないだろうと思ったそこで水位が止まって，何とか助かりました．病院が三角形の形をしていて突きあたりが階段なのですが，3方向から水が入って来て，ちょうど水の流れの行き先が階段で，流されるままに階段の入口まで流されてそこで助かったという職員もいます．

山田　1階の放射線室の壁にはまだ泥の痕が残っているので，こんな高いところまで水が来たのだなとい

うことが分かります. 先生はその時には3階にいらっしゃったのですね.

齋藤　1階に降りようと思ったら, 階段からバァーッと水が上がって来て行けなかったので, 2階の医局の前の吹き抜けのところに行ったところ, 下で職員も患者さんも流されているのが見えたのです. でも何もできない…. 看護師がシーツを持ってきたのでそれを縛って「掴まれ」ととにかく下に降ろしました. そんなことをしても何の力にもなれないという感じでしたが….

山田　二波, 三波の後は水位は戻ったのですか.

齋藤　そうですね. 水位が戻ったときに急いで1階, 2階に避難して来た人たちを3階まで上げました. それから水に浸かって呼吸困難になってしまっている人もいましたので, そういう方の蘇生など, いろいろ処置をしました. もしや3階, 4階まで水が上がって来たらもう駄目だろうと思っていました. ある程度避難していた人たちを落ち着かせて, それから外を見たら, テレビのニュースなどでやっていたように, 水の流れとともに家が流れていくというような状況でした.

山田　そういう衝撃的な瞬間が過ぎた後も, 現場でできる限り被災した人たちを助けることをされたわけですね.

齋藤　車に押しつぶされた家の中でサッシに足が挟まって逃げられなくなっている女性を何とか助けたいと近くの人が来られたので, 病院の職員が向かって5時間くらいかかってやっと助けたということもありました. 近くの高台に三十三観音遊歩道というところがあるのですが, 一度そこに逃げて病院に向かう途中に倒れた患者さんがいて, 私がかけつけたときにはすでに亡くなっていたということもありました.

その日は夕方5時に職員をみんな集めましたが, 病院から見る周りの景色があまりにも惨憺たる状態でわれわれも外に行けないという状況でした. 町中が壊滅的だったため, 外との連絡手段がなくなりました. 携帯電話がまずつながらなくなり, 固定電話もつながらなくなり…最初の1日だけは自家発電があったのでテレビがついたのですね. 外の情報は入ってくるのだけど, 女川の情報はどこにも報道されず, 職員にとっては, 家族が今どうしているのか, 自分の家がどうなっているのか, 全く分からない状況でした. 自分の家が流されているのを目の当たりにした職員もいました. 何よりも家族がどうしているのかということが職員にとって一番不安でした. 自分が今ここで生きているということもどこにも連絡をとることができませんでした.

山田　何もない中で, 先生は院長として, 患者や避難して来た人, なおかつ職員も守らなければならない. とにかくその日の夜を越えるのでさえ大変だったと思います.

齋藤　避難して来た人には病院にあった白衣や術衣などあらゆるものに着替えてもらいました. カーテンも取って, それも巻いて使ってもらいました. 病室はもちろん廊下もほとんど全部患者さんと避難して来た方で埋まっているような状態でした. 職員はテレビやラジオから入ってくる情報を聞きながら, その夜は過ごしたという感じです. 電気は多分1日しかもたないだろうと言われていましたが, 実際, 翌日, 朝日が昇った時に電源を停めたらそれから先は全く電気が使えなくなってしまって, 乾電池だけが頼りでした.

とにかく患者・被災者を助けよう

山田　次の日は雪も降り, またさらに厳しい1日になったと思います.

齋藤　次の日に, 役場の庁舎は駄目になってしまったけれど, 役場から避難した方がどうやら上の民家で

一晩過ごされたということがわかりました．その他，女川町総合体育館に避難している人もいるということで，役場の方たちが瓦礫を越えて情報を持って来てくれました．トランシーバーもとりあえずつながるようになって，体育館に大けがをしている人がいるので，何とか診てほしいということで，瓦礫の山を越えながら体育館まで行ったのですが，向こうでは処置できなかったので，担架でこちらに運んで来たということがありました．

山田　体育館には大勢の人が避難していたのですか．

齋藤　そのころは2,300 ～ 3,000人近くが体育館に避難していました．

山田　食べ物や飲み物はどうしたのですか？

齋藤　1日は非常食が何とかあって，後は医局や控室にあったお菓子などを食べていました．

山田　でも，入院患者や職員以外にも200人を超す人たちがこの建物の中にいたわけですよね．

齋藤　翌日に，歩ける方，元気な方には体育館の避難所の方に移っていただいて，本当に具合が悪い方や歩けない方だけに残ってもらう形にしました．ところが，病院で一晩過ごした方が翌朝「今日飲む薬がないのだがどうすればよいか」ということになりました．病院の1階の薬局はほとんど水没してしまって，一部の薬しか残らなかったので，1日分だけ渡すことにしました．さらに避難所からは元気な人が何十人分の名前と，血圧とか心臓病など大雑把な病名だけを書いて薬をもらいに訪れました．避難所にいる人たちは病院が今までどおりの機能を保っていると思われていたのですね．

山田　外から見ると建物はちゃんと建っているから分からなかったかもしれませんね．

齋藤　というよりも，「病院の1階も流されたんですよ．町内にあった院外薬局や，町内の開業の先生も全部流されたのですよ」と言っても，遠くの避難所にいる方は自分の家が流されたのは信じるけれど，まさか病院は大丈夫だろうという感覚だったようです．

山田　病院は，今は2階のセンターアトリウムで診療していますが，診療を始めたのはいつからですか．

齋藤　ある程度まとまった薬が支援物資として届いたのは2日目でしたので，センターアトリウムに移ったのは3日目の日曜日だったと思います．それまでは病棟で少しずつ薬を出したり，避難所の体育館に行って薬を1回分とか1日分渡すということをしていました．

山田　自衛隊が入ったのはその時が初めてですか？

齋藤　そうですね．最初は脇に機関銃を付けた戦闘用のヘリが上空に来て，「助けを呼びたい時，患者さんを搬送してほしい時は旗を振ってください」というので，職員一人を旗振り役にして，ヘリが来ると旗を振りました．透析の患者さんや妊婦さん，あとは大けがをしてこちらで応急処置をしたものの搬送しなければ駄目だという方を自衛隊のヘリで送りました．

山田　自家発電が消えてから土曜日の夜や日曜日の夜は全館真っ暗で，暖も取れず，食べ物もなく，その上翌日には雪も降って…

齋藤　食べ物がないということよりも，病院の中にいる職員にとっては，自分は生きているけれど身内の安否がわからないことが一番不安でした．紙コップに半分ぐらいのおかゆとスープが朝晩「食事です」と配られたのですが，それも喉を通らないのです．自分の家族は本当に生きているんだろうか，大丈夫なんだろうか，生きていたとしても避難所でどんな

聞き手：地域医療研究所所長・「月刊地域医学」編集長　山田隆司

聞き手：東京ベイ・浦安市川医療センター副管理者　宮崎国久

生活をしているんだろうかという思いで，私も家族が無事なのは火曜日まで分かりませんでしたので，数日はほとんど喉を通りませんでした．

山田　そういう中でも，すでに月曜日からは診療するブースを作って，私が4日目の火曜日にここに到着したときには，みんなガウンを着てサインペンで名前や看護師と記して，てきぱきと足早に仕事をしていました．被災者でありながら不眠不休で，医療者として，さらに困っている人を助けている姿は，本当に感動する，神々しいともいえる光景でした．

齋藤　自分も水没したのにそのまま風呂にも入れず1週間も，10日も働いていたわけですから，本当によくやってくれたと思います．誰がやろうと言ったわけでもなく，職員自らがああしましょう，こうしましょうと言って，自分たちでよく動いてくれました．

働いていないといられないというのがあったと思います．全員が避難所や自宅へ戻って家族の安否を確認したいと思っていたはずです．でも誰か一人が行ったら多分全員が外に行ってしまって，ここで医療をやる人が残らなくなってしまう．だから誰も自分から家族のところに行かせてくださいとは言わなかった．3日目，4日目になって，やっと外からの情報が入ってくるようになったので，1つの地域は誰か1人が見に行くことにして，その人に家族の連絡先などを託すようにした，という感じでした．

山田　地震があったとき私は東京にいたのですが，電車が止まった，あるいは帰宅できないという人もいて，自分の病院のことに対応せざるを得なかったのですが，でも東北が震源だとわかり，ニュースで映像が流れるようになったのに，最初の3日間くらいは女川町の情報は全くなく，役場と連絡がとれない町村の中に必ず南三陸町，女川町が入っていたので，役場も壊滅してしまったのではないか…女川町立病院も高台にあるとはいえかなり深刻な状態にあるのではないか…とわれわれも非常に心配しました．報道がない中でとにかく安否を確認しなければならないと，日曜日にヘリでこちらに向かいましたが，残念ながら着陸できず，病院の建物は外からみると結構しっかりしていたものの，駐車場は泥で汚れていたので，そこまで水が来たということは容易に想像がついたし，その時点でもまだ先生たちの安否がわからなかったので本当に心配でした．

齋藤　訪問リハビリに出ていた職員がその晩帰って来なかったのです．訪問した先で地震にあって，患者さんを車で高台まで乗せて行き，その部落の高いところに移動して一晩何とか過ごしたと，次の日歩いて病院に戻って来ました．帰って来たときは抱き合って泣いて喜びました．その職員が生きているんだろうか？ひょっとしたら駄目だったんじゃないか？と責任を感じて，一晩眠れませんでした．地震が起きた時間は，われわれは本当なら訪問診療に出ている時間だったのですが，たまたまその日は会議があったために病院にいたのですね．2日前に往診した家は流されて，患者さんも流されてしまいました．

協会の支え

山田　これほどの被災の中で，職員も含め，病院の中にいた人たちがほとんど一命をとりとめたというのは，正直なところ奇跡のように思いました．ここに研修に来ていた東京の職員たちが，車で黒川病院に到達したというのを聞いた時は，あれだけの被災の中をよく陸路でとにわかには信じられない思いでしたが，それが女川の最初の情報でした．多分日曜日だったと思います．

齋藤　研修にいらしていた方たちが，地震の後，「会議をキャンセルしてもう帰ります」と言ったのですが，津波が来るという話があったので，「津波が来ると女川からの帰りは一本道なので，途中で寸断されると帰れなくなってしまうし，万が一途中で津波に遭うと大変なので少し待ってください」と待ってもらったのです．その後に津波が来たので，そのまま行ったら危なかったかもしれません．彼らが仙台から借りてきたレンタカーは流されてしまいました．3日経って日曜日に，病院の外で避難していた職員が瓦礫を越えて通勤して来て，どうやら外に行けそうだということになったのですね．そこで彼らが，「何としても今日中に黒川病院に行ってみます」と言ってくれて，それでその職員の車で黒川まで行ってもらったのです．

山田　それで協会の職員は無事らしいと分かり，また陸路で女川へ入れると分かったので，仙台にいた宮崎先生たちが翌月曜日に女川へ入り，その日のうちに協会本部に対策本部ができて支援活動が本格的に始まったわけです．最初は本当にどういった支援が必要か，どういうお手伝いができるのかわからない状態で，まず先生たちの無事を確かめることに尽きたという感じですが．

齋藤　それまでは本当に心細く，こんな状況があと何日続くのだろうと思っていたところに，宮崎先生が来てくださって，「齋藤　頑張れ！　吉新・山田」と手書きされた支援物資が届いた時には，センターアトリウムで泣き崩れてしまいました．

山田　あれは日曜日にヘリで飛んだときに投下するつもりでできなかったのですよ．

齋藤　自分たちだけではない，協会が助けに来てくれたと本当に嬉しかったですね．その後も協会から次々と先生方が来てくださり，ヘリが着いて物資が届くたびに，職員みんなが「協会ってやっぱりすごい．自分たちも協会の職員になれるというのは本当に素晴らしいことなんだ」と言ってくれました．

山田　全国の協会施設に支援者を募ったところ，医師や看護師，コメディカル，事務職員が本当に大勢手を挙げてくれました．最初のころは，危険があるかもしれないことは否定できない中，物資も不十分で，暖もとれず，寝るときは会議室の冷たい床に寝袋で寝るというかなり厳しい状況であったにもかかわらず，自主的に，これだけの多くの人たちが支援に来てくれたことに，私も驚きました．みんなが居ても立ってもいられない，女川を助けるんだ，先生たちを支援するんだという気持ちだったと思います．情報についても，協会内のグループウエアであるMOSSを通じて，即，職員全員に女川の状況を知らせました．MOSSはこれまで職員がそれほど閲覧しているとは思えなかったのですが，今では毎日アクセスが何万回を超える状態です．

地震の時には，吉新通康理事長は視察のために海外に居られたのですが，海外からMOSSで女川

協会の支援ヘリ

の状況を知り,「女川をみんなで救おう. 現地の人たちが疲れているだろうから, 早期に交代できるようにしてほしい」という指示があり, 協会全体が支援に動くという形になったのです. 今回の被災の中で, 協会は気持ちがひとつになり, よい仕事ができたのではないかと感じています.

女川の復興に向けて

山田　この1年間, 先生は女川の地域医療のために力を尽くされてきて, あと少しで協会の指定管理というスタートラインに立って, 自分たちの計画に則った運営が始まるところだったわけですが, 振り出しに戻ったどころか, マイナスまで戻ることになってしまいました. 今どのように考えていますか.

齋藤　そうですね. ここは人口1万人の町の100床の病院で, 東北大から医師が赴任し, いろいろな専門科があったのですね. しかし東北大からここまでは距離的に離れていることもあり, 総合医が中心となって, 地域の方が安心して暮らしていけるような, 地域に根ざした医療を実践していこうと考えていました. こんな状況になってしまったので, 町作りから始めなくてはなりませんが. 今回私だけではなくて職員もみんな感じていますが, やはり医療というのはライフラインです. 水が来ない, 電気が来ない, ガスが来ないのと同じように, 医療がなければ生活できません. それを今職員の誰もが感じています. 今後町を復興していく中で, 自分たちがやらなければいけないのは何か, 復興に合わせて少しずつ自分たちの役割も変わっていくだろうし, 最終的にどういった形になるのか, まだ全く見当もつかない状態ではありますが.

山田　これまで女川は医療崩壊, 医師不足という地域で, 医療再生を目指して, 総合医・地域医という今までの齋藤先生のノウハウを活かしてもらいたいと考えていましたが, いまや地域自体, 行政も崩壊してしまっている状況です. 医療再生というよりは, 地域再生を同時に考えていかなければならない. 協会にとっても全く未知な経験です.

齋藤　私にとっては人生の目標が変わってしまいました. 今回の震災で病院が津波で流されてしまった地域もあり, そういうところではそこで生活をすることもできず, 集団で疎開するしかない状況だと思うのですが, 女川はとりあえず病院が残ったので, 何とかわれわれが踏みとどまって医療を続けることで, 町もここで再生できるのではないかという思いがあります.

山田　町長さんともお会いしましたが, 元通りにするのではなく, 本当に新しい町を作るのだということを気丈夫に言っておられましたし, 町民にもそれに懸ける熱いものがあると思います. 壊滅した町を病院から眺めると, 夢なら覚めてほしいというような現実ですが, 当初5,000人が行方不明と報道されていましたが, 実際には千何百人程度で収まるのではないかということで, 町の人たちがこの町を再生しようという活力は十分残っているのではないかと思います. この町が消滅するようなことはないと私は確信しています.

齋藤　職員もこれまではぎくしゃくしたりしたこともあり

ましたが，今はみんな一丸となって働いています．今までは自分の仕事はこれだというところがあったのですが，今自分がしなければいけないのは何か，自分が今何ができるかということを考えてみんなで働いていますので，風通しが良いし，みんなで一緒にやっているという雰囲気ができています．

山田　先生は家族を心配しながら，自分も大変な思いをしながらこの3週間が過ぎたわけですが，託されてしまった，逃げ場のない仕事を背負ってしまった気がしないでもないのですが…町の復興に対して，協会も地域医療の集団として何とかお力添えしたいと思います．

齋藤　地域医療をやろうと思った時には，へき地で困った人たちがたくさんいて，満足に医療を受けられないような人たちがたくさんいて，その中で自分ができることは何だろうと考えてこの道に進んだわけですが，今，被災地では究極に困った人たちがもっと大勢いる．避難所にいて，辛い思いをしている人たちが，1日も早く普通の生活に戻って安心して暮らしていけるように，その人たちの健康を守れるような，そういう形にしていきたいと思います．

山田　宮崎先生からも一言お願いします．先生は最初にここにかけつけてくれて，齋藤先生にとっては神様みたいな存在だと思います．

宮崎国久　こういうふうになる前の女川に1回来たかったなと思いますので，復興した後の女川をぜひ見たい．そこまで一緒にやっていきたいと強く思っています．

齋藤　病院の窓から見る朝日が本当にきれいな町だったのですよ．

山田　きれいな朝日をまたみんなで見る日が来ると信じています．

齋藤　協会の方々には熱い支援をいただきまして本当に感謝しています．美しい女川町を再生できるように，われわれも頑張っていきたいと思いますので，今後ともご支援をよろしくお願いします．今日は，ありがとうございました．

山田・宮崎　齋藤先生，頑張ってください．

女川の海岸から見た朝日